

中世歌謡と漢語
— 『宗安小歌集』の語彙「しんこ」をめぐる—

謝 林

Medieval Japanese songs and Chinese:
About the word *shinko* in *Sōan-koutashū*

Xie, Lin

Abstract

This article attempts to reinterpret the 38th song of the kouta songbook *Sōan-koutashū*, which is said to be from between the *Kanginshū* in the late Middle Ages and the Ryūtatubushi Kouta in the early modern period. First, the word しんこ *shinko* used in kouta has traditionally been interpreted as 尽期 *jingo*, but after reexamining its validity and grounds, the interpretation of 真箇 *shinko* rather than 尽期 *jingo* is presented. Second, the two expressions, 月をふんては and 風雨の来 are considered. In particular, emphasis is placed on the reinterpretation of the 38th song with its strong relationship with Chinese poetry.

First, as a result of investigating old dictionaries and Japanese dictionaries since the modern era, it became clear that the word 尽期 *jingo* does not have the meaning of *future eternity* and *eternity* which were the conventional interpretations. The misunderstanding of the meaning of the word arose from the misunderstanding of 尽未来(際) *jinmirai/jinmiraisai* that was taken up in the *Setsuyōshū*.

Next, based on the fact that 心可揺 *shinkoyo* that appears in *Jihpên fêng t'u chi* means *heart sincerity*, I consider the 真箇(个) *shinko* that can be found in literature such as Chinese poetry and *shōmono*. I explore the possibility of understanding しんこ *shinko* as 真箇 *shinko*, which is also listed in the old dictionary. As a result, it can be determined that 真箇 *shinko* is more suitable for しんこ *shinko* in *Sōan-koutashū* than 尽期 *jingo*.

Finally, I compare 月をふんては and 風雨の来 with 踏月 *tōgetsu* and 風雨来 *fūrai* in Chinese poetry, and reinterpret the 38th song based on the interpretation of 真箇 *shinko*. As a result, it was shown that the interpretation would be "an admirer who visits on a rainy day is one who is sincere."

From the above consideration, しんこ *shinko* in *Sōan-koutashū* should be understood as 真箇 *shinko* instead of 尽期 *jingo*, and the songs in the collection that use Chinese expressions are traditional Japanese view of romance but given a new flavor with the introduction of Chinese-style expression. It is concluded that the 38th song is a mixture of Japanese and Chinese created by someone who likes Chinese poetic expression.

Keywords : *Sōan-koutashū*, *jingo*, *shinko*, Chinese, song

要旨

本稿は、中世末期の『閑吟集』と近世初期の隆達節小歌との中間に位置するとされる歌謡集『宗安小歌集』三八番歌について二つの側面から再解釈を試みるものである。第一に、小歌に使用されている語彙「しんこ」は、従来「尽期」と解釈されてきたが、その妥当性と根拠を再検討し、「尽期」を退けて新しく「真箇」という解釈を提示する。第二に、「月をふんては」と「風雨の来」の二表

現を考察する。特に、三八番歌が漢詩との強い関連性を有する点を重視して再解釈する。

まず、古辞書や近代以降の国語辞書を調査した結果、「尽期」という言葉は従来の解釈であった「未来永劫」「永遠」のような意味を持たないということを明らかにした。同語の意味に対する誤解は、節用集に取り上げられた「尽未来（際）」に対する誤解から生じたものであった。

次に、『日本風土記』に現れた「心可揺」が「心誠」の意であることを手掛かりに、漢詩文や抄物などの文献に散見する「真箇（个）」を考察し、「しんこ」を同じく古辞書に記載されている「真箇」として理解する可能性を模索した。その結果、「尽期」より「真箇」のほうが『宗安小歌集』の「しんこ」に相応しいということを明らかにした。

最後に、「月をふんては」と「風雨の来」を漢詩文にある「踏月」「風雨来」と比較考察し、「真箇」という解釈に基づいて三八番歌の再解釈を試みた。その結果、「風雨の日に訪れる人こそ誠意を持つ恋人」という解釈となることを示した。

以上の考察から、『宗安小歌集』の「しんこ」は「尽期」ではなく「真箇」と解すべきであり、漢語系表現が使用される同集の収載歌は日本の伝統的な恋愛観を踏まえつつ、漢風表現の導入により新味が生じた。三八番歌は、漢詩表現を好む人物が作り上げてから民間に流入した和漢折衷の小歌であるとの結論に至った。

キーワード：宗安小歌集，尽期，真箇，漢語，歌謡

はじめに

月をふんてはよのつねそろよ風雨の来こそしんこよの¹

『宗安小歌集』三八番歌である。「月をふんては」「風雨の来」²「しんこ」など漢語に由来すると見られる表現が同歌の特徴をなしている。特に「しんこ」という語については、同集七十一番歌「しんこの君はこぬもよい會者は定離の世の習」³、隆達節小歌の二七六番歌「月を踏むではよのつね候よ、風雨の来こそしんこなれ」⁴の中にも散見されるため、当時流行していた表現と考えられる。『宗安小歌集』に関する従来の研究・注釈書を精査すると、昭和六年に、同書を世に初めて紹介した笹野堅氏の『室町時代小歌集』⁵には、既に仮名表記の「しんこ」を漢字の「盡期」に改めていることが確認できる。浅野建二氏校注『室町時代小歌集』⁶では、同

1 国文学研究資料館所蔵の『宗安小歌集』（【請求記号】99-84）のオンライン公開されている写真版を参照した。

2 『宗安小歌集』の原文は旧字体の「來」の字である。表記を統一する為、論述する際は、旧字体の「來」字は、すべて常用字体の「来」の字に変換する。

3 同1。

4 笹野堅校注『近世歌謡集』（日本古典全書 第七十五回配本）朝日新聞社 一九五六年 九八頁。小野恭靖編『隆達節歌謡』全歌集 本文と総索引（笠間書院 一九九八年）の「諸本索引（附・諸本配列一覧）」によると、当該の隆達節小歌（二七六番）は「文禄二年九月江川甚左衛門尉宛百首本」にしか収録されていない（一一一頁の「C」を参照）。この歌は『宗安小歌集』の三八番歌と酷似する。

5 笹野堅著『室町時代小歌集』萬葉閣 一九三一年。『宗安小歌集』はかつて『室町時代小歌集』と称されていた。同書の五九頁に「風雨の来こそ盡期よの」、六四頁に「盡期の君は來ぬもよい」とある。序言に「活字にしたものには、通讀に便せんがため試に濁點を施し、句讀を切り、假名を漢字に改めたものがある。その改めたるは原文の假名を振つた」と記している。

6 浅野建二校注『室町時代小歌集』（新註國文學叢書）大日本雄辯會講談社 一九五一年 一九九頁。笹野氏の『室町時代小歌集』と同名であるが、当該注釈書は『閑吟集』『狂言小歌集』『室町時代小歌集』『隆達節小歌集』に関する校注である。

様に「盡期」を当てており、同語に関して「盡期の君の略。盡期は未来永劫、永久の意」と頭注を付している。その後、北川忠彦氏校注『宗安小歌集』⁷では「尽期」の表記を継承し、「[尽期の君]の略。二世を契った人。永遠の恋人」と解釈し、従来の見解を踏襲されている。

しかしながら、『日葡辞書』を紐解いて「尽期」という語を見ると、その解釈は「結末、あるいは、終わり」⁸となっている。これに対して、『宗安小歌集』の研究・注釈書が提示している「未来永劫、永久」「二世を契った」「永遠」という理解は、「結末」「終わり」と正反対である。なぜ「尽期」を「未来永劫、永久」または「二世を契った」「永遠」として理解されたのであろうか。『日葡辞書』の記述が確かならば、「尽期」という語は他の解釈の可能性が生じてくる。当該小歌を正しく解釈するには、「尽期」という語彙に対する解釈を明確にしなければならない。

それだけではない。「しんこ」に当てた「尽期」という語の妥当性にも疑義が生じるであろう。冒頭に掲示した『宗安小歌集』の原文に見る通り、三八番歌の「しんこ」と七一番歌の「しんこの君」は、二箇所とも濁点がついていないひらがな表記である。また、三八番歌と継承関係を持つと見られる隆達節小歌中の類歌（前掲、二七六番歌）も同様に「しんこ」と表記されている。はたして「尽期」以外に「しんこ」に相応しい漢語が存在する可能性が生じるのである。それ故に、「しんこ」に関する語彙を再調査し、「尽期」という漢語表記の妥当性を検証する必要がある。

さらに、冒頭の部分に述べたように当該の歌には、「尽期」以外にも、「月をふんては」や「風雨の来」など、漢語を踏まえたと思われる表現が含まれている。日本の伝統的な表現技法を踏まえつつも、個々の漢語表現に対して漢詩文からの影響という視点から三八番歌を解釈し直す必要があるように思われる。

以上の問題意識に基づき、小稿は、『宗安小歌集』三八番歌に使用されている漢語系語彙を考察した上で、より広い視点から同歌の再解釈を試みるものである。

一. 「尽期」は永遠ではない

本来ならば、歌を構成する各表現を順番に検討すべきであるが、「尽期」の原文表記がひらがなの「しんこ」であるため、まず最初に「しんこ」という語に注目して論を進める。

まず確認しておかなければならないことがある。そもそも『宗安小歌集』の原文は、すべて濁点を付していないものなのである。そのため、「しんこ」という語の読み方は、「しんこ」「じんこ」「しんご」「じんご」の四つの可能性を持ちうる。前節に述べたように、『日葡辞書』には「じんご（尽期）」という語を収めている。その他、同辞書には「シンコ（新古）Ataraxij, furuxi.（新しい、古）新しいことと古い昔のこと、文書語」「ジンゴ（人語）Fito cataru.（人語）人間の談話」という二語もあるが⁹、三八番歌中の「しんこ」をこの二語のどちらかの意

7 北川忠彦校注『閑吟集 宗安小歌集』（新潮日本古典集成（第五三回））新潮社 一九八二年 一七三頁。「尽期」は、「盡期」に同じ。「盡」は「尽」の旧字体である。以下、両語が類出するため、引用原文以外、論述する際はすべて「尽期」に統一する。

8 土井忠生他編『邦訳 日葡辞書』岩波書店 一九八〇年 三六三頁。『日葡辞書』からの引用は、以下、同書による。

9 同8。「新古」（七六九頁）、「人語」（三六三頁）。

味で解釈することは考えづらい。

次に、各種の節用集を精査した結果の一覧を提示する。

- a. 『和漢通用集』¹⁰…………… 盡期 つくる時也
 b. 『文明本節用集』¹¹…………… ⑦ 盡期 ⑧ 休息 一期 或作究期, 盡期同義
 c. 『黒本本節用集』¹²…………… 盡期
 d. 『饅頭屋本節用集』¹³…………… 盡期
 e. 『易林本節用集』¹⁴…………… 盡期 一未來
 f. 『伊京集』¹⁵…………… 尽期
 g. 『明応五年本節用集』¹⁶…………… 尽期

「尽期」という語は、各種の節用集に収載されており、何れも濁点が付く「じんご」として発音している。節用集を精査すると、実際に濁点が付いていない「真箇（しんご）」も存在する。例えば、『和漢通用集』には「真个 まこと也」¹⁷、『文明本節用集』には「真箇」¹⁸、『饅頭屋本節用集』には「真箇」¹⁹とある。『和漢通用集』の解釈にあるように、「真箇」の意味は「まこと」であり、三八番歌中の「しんご」の漢語表記にもなりうるため、「尽期」と「真箇」についてそれぞれ詳しく検討する。

筆者が調査した限り、節用集においては「尽期」の解釈は、『和漢通用集』だけが、『日葡辞書』と同様、何かの「終わる時」「尽きる時」としてこの語を解釈している。また、『文明本節用集』の「休息」の項目の次に「休期」という語を挙げて、その釈意の部分に「或作究期, 盡期同義」（或いは究期に作る。盡期と同義）と説明している。「休（む）」にしても「究（む）」にしても何れも休止や終了の意を持ち、「尽（くる）」を加え、有限と無限のどちらかというとしてすべて有限のイメージが強い。これに対して、「未来永劫, 永久」「二世を契った」「永遠」のような解釈は、永久または無限に近く、「尽期」という語のイメージと正反対になっている。

以上から、『日葡辞書』や節用集のような古辞書の中では、「結末」「終わり」「尽くる時」のような解釈しか記載していないにもかかわらず、『宗安小歌集』三八番歌の「尽期」がなぜ「未来永劫, 永久」「二世を契った」「永遠」として解釈されているのかという疑問が生じる。

この疑問を解くために、近代以降に成立した国語辞書計四十四種類（改版も一種として計算する）を調査し、その結果をまとめたのは表1である。なお、表1の中では「尽期」または「尽

10 中田祝夫他編『印度本節用集 和漢通用集他三種研究並びに総合索引（影印篇）』勉誠社 一九八〇年 二二五頁。

11 中田祝夫著『改訂新版 文明本節用集研究並びに索引（影印篇）』勉誠社 一九七九年 四二四頁, 四九〇頁。

12 中田祝夫著『改訂新版 古本節用集六種研究並びに総合索引（影印篇）』勉誠社 一九七九年 四〇三頁。

13 同12, 二九二頁。

14 同12, 五三五頁。

15 同12, 六一頁。

16 同12, 一八五頁。

17 同10, 二二六頁。「个」の字は「箇」或いは「個」に同じ。引用原文以外、論述する際は「真箇」に統一する。

18 同11, 四七九頁。

19 同11, 二九一頁。

期の君」という語を収録する辞書のみを例示した²⁰。また、各辞書には、「尽期」という語の下に最大三種の解釈が提示されていた。

細かく見ていく前に、小学館の『日本国語大辞典 第二版』の代表的解釈を示しておく（表1中の①②③は『日本国語大辞典 第二版』の三種の解釈と対応している）²¹。

じんご 【尽期】〔名〕

①物事が尽きる時期。限り。際限。

* 本朝文粹（1060頃）十四・為謙徳公報恩修善願文〈菅原文時〉「五内無_レ静日_レ、四運有_レ尽期_レ」

* 吾妻鏡 - 仁治元年（1240）十一月二三日「可_レ被_レ召_レ所領_レ之旨、先日雖_レ被_レ載_レ式日_レ、被_レ召_レ所領_レ者、就_レ之所々訴訟無_レ尽期_レ歟」

* 正法眼蔵（1231-53）発無上心「その功德の深も無涯際なり、広も無涯際なり。窮劫を言語として、如来これを分別すとも、尽期あるべからず」

* 東寺百合文書 - は・建治二年（1276）七月一四日・阿性房静俊陳状（大日本古文書一・二九）「向後も噉々之勝事等不_レ可_レ有_レ尽期_レ候_レ之間、眞実歎入候」

* 文明本節用集（室町中）「尽期 ジンゴ」

* 京大二十冊本毛詩抄（1535頃）三「正義に色々に名あれども尽期も無いことぞ」

②未来永劫。永久。

③「じんご（尽期）の君」の略。

* 歌謡・宗安小歌集（1599-1615頃か）「月を踏んでは女の常候よ、風雨の来（くる）こそ尽期よの」

〔方言〕 限り。際限。島根県美濃郡・益田市725 山口県793 ◇じんご 島根県石見709 〔発音〕ジンゴ 〈標ア〉ジ 〔辞書〕文明・伊京・明応・天正・饅頭・黒本・易林・日葡・書言・ヘボン・言海 〔表記〕尽期（文・伊・明・天・饅・黒・易・書・ヘ・言）
じんごの君（きみ） 未来永劫変わるまいと堅く誓い合った愛人。じんご。

* 歌謡・宗安小歌集（1599-1615頃か）「尽期の君は来ぬもよい、会者は定離の世の習」

①の解釈は、『日葡辞書』や節用集などの古辞書と共通している。その一方で、②③の解釈は、いつ近代の国語辞書に追加されたか不明である。筆者が調査した限り、1933年出版の『大言海』（6番）以前に出版された各種の国語辞書には、何れも②③のような解釈は記載されていない。ところが、『大言海』（1933年）の2年後に出版された『大辞典』（1935年）には、②③の解釈

20 二語とも収録していない辞書は以下の通り。『和英語林集成』（一八七二年）、『言苑』（博文館 一九三八年）、『明解国語辞典』（三省堂 一九五二年）、『大漢和辞典』（大修館書店 一九五九年）、『旺文社 古語辞典』（旺文社 一九六〇年）、『岩波国語辞典（初版～第五版）』（岩波書店 一九六三～一九九四年）、『新明解国語辞典（初版～第六版）』（三省堂 一九七二年～二〇〇七年）、『富山房 国語辞典』（富山房 一九七五年）、『学研国語大辞典』（学習研究社 一九八一年）、『広漢和辞典』（大修館書店 一九八二年）、『江戸時代語辞典』（角川学芸出版 二〇〇八年）。

21 『日本国語大辞典 第二版（第七巻）』小学館 二〇〇一年 五八三頁。見やすくする為に、用例ごとに改行した。

表 1 主要国語辞書に収載する「尽期」及び「尽期の君」

通し番号	辞書名	出版年	尽期①	尽期②	尽期③	尽期の君	備考
1	『日葡辞書』	1603-1604	結末、終わり	—	—	—	『日葡辞書』の解釈を参照物とする。
2	『言海』	1890	○	—	—	—	
3	『日本大辞書』	1893	○	—	—	—	
4	『國語漢文ことばの林』	1922	○	—	—	—	
5	『大言海（第二巻）』	1933	○	—	—	—	
6	『大辞典（第十四巻）』	1935	○	未来永劫。 永久。	盡期の君の略。	○	筆者の調べる限り、はじめて「未来永劫。永久」という解釈が登場した。しかし、管見の限り、この解釈を支える用例はない。
7	『明解國語辞典』	1943	○	—	—	—	
8	『広辞苑』	1955	○	○	○	—	『広辞苑』初版は、『大辞典』を踏襲した三種類の解釈が掲載されている。
9	『新訂大言海』	1956	○	—	—	—	
10	『新言海』	1959	○	—	—	—	
11	『広辞苑 第二版』	1969	○	○	○	—	
12	『日本国語大辞典』	1974	○	○	○	—	
13	『佛教語大辞典（上巻）』	1975	○	—	—	—	
14	『広辞苑 第二版補訂版』	1976	○	○	○	—	
15	『広辞苑 第三版』	1983	○	×	○	—	この版以降、②「未来永劫。永久」の意味は削除された。
16	『角川古語大辞典』	1987	○	—	○	○	
17	『大辞林』	1988	○	—	○	—	
18	『広辞苑 第四版』	1991	○	×	○	—	
19	『時代別国語大辞典 室町時代編（第三巻）』	1994	○	—	○	—	
20	『大辞林 第二版』	1995	○	—	○	—	
21	『広辞苑 第五版』	1998	○	×	○	—	
22	『日本国語大辞典 第二版（第七巻）』	2001	○	○	○	—	
23	『広辞苑 第六版』	2008	○	×	○	—	
24	『広辞苑 第七版』	2018	○	×	○	—	

【注】

* 「○」は「当該の意味が存在する」の意、「—」は「当該の意味が存在しない」の意、「×」は「当該の意味が消滅した」の意となる。

* 「尽期の君」を親項目として独立させているものは「尽期の君」の一覧に統一する。

が出現している。その後、『広辞苑』（8番、11番、14番）や『日本国語大辞典』（12番、22番）などの辞書も三つの解釈を継承している。

『大辞典』以降の多くの辞書は、「尽期」という語について、①「結末、終わり」と③「盡期（尽期）の君の略」の解釈を継承している。『広辞苑』は②「未来永劫」「永久」の解釈も継承していたが、1983年の第3版から削除されたことが分かる。

また、②「未来永劫」「永久」に関する『日本国語大辞典』の短い解釈は、①③と異なるだけでなく、その典拠等も示されていない。そして「尽期」の子項目である③の「尽期の君」の解釈の根拠は、『宗安小歌集』に使用された二首の歌（用例）以外になく、「尽期の君」の「尽期」は用例もない②の意味で解釈されているのである。

『宗安小歌集』（旧称『室町時代小歌集』）には「しんこの君」（七一番歌）という表現もあるため、辞書には子項目として「尽期の君」の略語という項目も設けられていることもあれば、辞書によって親項目として独立させていることもある（6番、16番）。「尽期の君」の解釈は、「尽期」の「未来永劫」「永久」の意味と関係があると考えられているが、この「未来永劫」「永久」が何に由来するものかを明らかにしなければならない。

さて、ここで再び『易林本節用集』の「尽期」に関する記述²²を確認する。なお、『角川古語大辞典』にも用例として『易林本節用集』の「尽期」が挙げられているが、この表記は筆者が調査した『易林本節用集』の「尽期」の項目と異なっているため、ここで併記する。

『易林本節用集』……………^{ジンゴ}盡期 —^{ミライ}未来
 『角川古語大辞典』……………「尽期^{ジンゴ}〈(尽期) 未来^{みらい}〉」〔易林節用集〕²³

『易林本節用集』の原文通り、「未来」という語の前にある「—」という符号は、「尽」という文字の省略である。つまり、「尽」で始まる語の用例として「尽未来」を示している。この「尽未来」は「尽未来際」²⁴という仏教用語の略語であり、仏教の經典に数多くの用例²⁵が見られるほか、抄物にも散見される。抄物『四河入海』における用例は以下の通りである（下線は筆者によるものである）²⁶。

財施ハ有盡カ法施ハ盡未来際マテモ不盡ソ（四ノ四 1ウ）
 盡未来際マテモ説ヤムコトナイソ（七ノ三 52ウ）
 無盡灯ハ一心性ヲ譬テ盡未来際マテ盡コトナキラ云ソ（八ノ三 34ウ）
 坡言ハ我カ無盡處ヲ要識善惡トモニ不聞不見テ無心ニナリカヘリテアル處コソ盡未来際マテ用不盡ナル處ヨト云ソ（一九ノ一 67オ）

22 同14。

23 『角川古語大辞典（第三卷）』角川書店 一九八七年 三八一頁。「じんご（盡期）」の項目を参考した。

24 「尽未来〔名・副〕」「じんみらいざい」の略（『古語大辞典』小学館 一九八三年 八六二頁）、「盡未来際 じんみらいざい。未来の果てに至るまで。いつまでも。永遠に」（『佛教語大辞典（上巻）』東京書籍株式会社 一九七五年 七九九頁）。

25 SAT 大正新脩大藏經テキストデータベースの検索機能を利用し、1391個の検査結果を得た。

26 『抄物資料集成 第四巻 四河入海』清文堂出版 一九七一年。

過去久遠ヨリ盡未来際マテカヤサル、コトナキ物カ有ソ（二一ノ四 28ウ）

『日葡辞書』には「ジンミライサイ（尽未来際）無窮・永遠，または，これから先の無限の時間。文書語」²⁷とある。『四河入海』の「財施ハ有盡カ法施ハ盡未来際マテモ不盡ソ」の例では，財施の有尽と法施の無尽を比較し，法施が未来まで無尽のものであると説明している。「尽未来」または「尽未来際」という仏教用語の意味こそ「未来永劫」「永遠」を表していることを明らかにしている。一方、『角川古語大辞典』は、「一」を「尽期」に入れ替えて「(尽期) 未来」と掲載しているが，これは誤りである。

以上から推定されるのは，最初に「尽期」の意味を「未来永劫」「永遠」と解釈したのは、『易林本節用集』にある「一未来」という「尽」の漢字を含む用例を直前の「尽期」の釈意と間違えて辞書に採り入れたからではないかと考えられる²⁸。そして，「尽期の君」の「尽期」も②の意味から取ってきたことから，「未来永劫変わるまいと堅く誓い合った」²⁹という解釈が受け継がれてきたと考えられるのである。

これ以外にも，「尽期」という語は常に打消し表現の「無」を伴って使われる傾向がある³⁰。「無尽期」とすれば永遠・無限の意であり，「尽未来（際）」の同義語として成立する。一方，「尽期」と「尽未来（際）」は反対語の関係であり，それを混同する近代以降の国語辞書の記載は，何れも節用集に対する誤解に由来すると考えられるのである。

ところで，前述したように『広辞苑』の第三版以降，「尽期」の「②未来永劫。永久」という解釈がすべて削除されている。しかし，「③尽期の君」とその解釈は依然として保留している。これは，『宗安小歌集』の研究者が元の歌の「しんこ」「しんこの君」を「尽期」「尽期の君」と定めたことが継承され続けていたことを示しているだろう。

ここまで「尽期」という言葉について考察した内容をまとめると，近代以降の国語辞書に記述された同語に関する内容には，三つの誤解があった。第一は，『角川古語大辞典』にある「(尽期) 未来」は節用集に対する誤解である。第二は，「尽期」の意味を「尽未来（際）」の意味と混同している誤解である。第三は，第二の誤りにより「尽期の君」という語の意味を誤解していることである。近代以降の国語辞典と異なり古辞典における「尽期」の意味は，永遠ではなく終わりや尽きる時期となっている。従って，「風雨の来こそ尽期よの」という小歌の一句も「風雨の来こそ終わりだよ」という意味に変わり不可解な歌となる。

はたして「尽期」という漢語で「しんこ」を当てることは妥当なのであろうか。次節では，「しんこ」という原文のひらがな表記に対し，最初に候補として提示した「真箇」という語について検討する。

27 同8。

28 「尽期」は「尽未来（際）」の同義語として理解されている。

29 同21，「じんごの君」の項目を参照。

30 例えば，「如彼無盡期 我願亦復然」（『大方廣佛華嚴經卷第三十四』『大正新修大藏經 第十卷華嚴部下』，一八四頁），「長劫獨受焚燒苦 如是展轉無盡期」（『大乘本生心地觀經卷第四』『大正新修大藏經 第三卷本緣部上』，三一〇頁）など。

二. 「真箇」の可能性

前節で述べたように、『宗安小歌集』の二首及び隆達節小歌の一首は、何れも「しんこ」を「尽期」という漢語で表記していない。他に候補となりうる漢語は、節用集にある「真箇」という語である。同語の意味は、『和漢通用集』の「真^{しんこ} 箇 まこと也」から知ることができる。同時代の詩文や禅林語録の中にも数多くの用例がある。

『中華若木詩抄』³¹には、義堂周信の漢詩「落葉」を収載している。同詩とその説明の部分には以下のようにくだりがある（下線は筆者によるものである）。

落葉 義堂

夜雨蕭々四五更 愁辺細聽到天明 開門試倚風前看 真箇梧桐落葉声

… (中略) …

ヨク／＼見レバ、真^{しんこ}箇梧桐ノ風ニ落ツル声ヲ雨カト思イタル也。真^{しんこ}箇ノ个ノ字ハ、付^{ツケ}字也。
真実ト云フ心ゾ。

(『中華若木詩抄』二一八番)

「真箇（真箇）」に対する解説によると、「个（箇）」という文字は、二文字語彙を成立させるために付す補助の機能として働き、実際には意味がないと述べている。つまり、「真箇」という語は「真」の部分が語義の主であり、「真実、誠実」の意味として理解されるべきである。同語の構造からみると、「个（箇）」字を補うことによって同語が話しやすくなり、口語に近い通俗性が増えてくる。また、詩文を創作する際に字数を合わせるため、「真箇」も多用される（下線は筆者によるものである）。

紫衣師號柰家貧 綾紙青銅三百緡 大用現前贗長老 看來真箇普州人

(『狂雲集』³²)

萬斛新愁兩鬢銀 錦城老去又逢春 是翁真箇詩中佛 花外柳邊千億身

(『翰林五鳳集』卷第九³³)

稟生極癖百無知 不許針砭謁國醫 滿室唯須藏史籍 張公真箇是我師

(『翰林五鳳集』卷第三七³⁴)

31 大塚光信他校注『中華若木詩抄 湯山聯句鈔（新日本古典文学大系53）』岩波書店 一九九五年 二五〇～二五一頁。『中華若木詩抄』からの引用は、以下、同書による。

32 中本環校注『狂雲集・狂雲詩集・自戒集（新撰日本古典文庫5）』現代思潮社 一九七六年 一五七～一五八頁。詩題は「賀大用庵養叟和尚賜宗慧大照禪師号 元雙杉一書省而不書」である。

33 佛書刊行会編纂『翰林五鳳集 第一』（大日本佛教全書144）佛書刊行會 一九一四年 二一〇頁。詩題は「少陵春游圖」。瑞溪周鳳作。

34 佛書刊行会編纂『翰林五鳳集 第二』（大日本佛教全書145）佛書刊行會 一九一五年 七七〇頁。詩題は「砭愚堂」。西胤俊承作。

以上の詩文から分かるように、「真箇」は「本当」「誠」「流石」の同義として機能している。詳しく見ると、『狂雲集』の「看來真个普州人」は「よく見ると（彼は）本当の普州人（盗人）だ」³⁵という意味となる。瑞溪の「是翁真箇詩中佛」は「この翁は誠に詩中の仏様だ」と理解できる。西胤の「張公真箇是我師」は「張公は流石に我が師匠だ」と解釈することができる。これら漢詩句に使われている「真箇」は、漢詩文の創作において語と語を繋げるために非常に使いやすかったと推察できる。通俗性をもつ詩文だけでなく、『碧巖録』³⁶をはじめとする口語文献である禅僧の語録には「真箇」という語も数多く使用されている。

語法の面からみると、漢語の口語に近い「真箇」という語彙は、漢詩や漢文の文脈の中では一般的に副詞として機能する。一方、「しんこ」は日本語の環境に入ってその言葉も日本語の文法に適応し、「しんこよの」「しんこの君」のように、名詞・形容動詞的使い方に変化したのではないかと考えられる。

また、中世の僧侶が漢詩文のスタイルや風格を研究し真似たとされる北宋の文豪・蘇軾の漢詩文には、「真箇」という表現がしばしば使用されている³⁷。先に列挙した禅林詩文や語録のように、「真箇」という言葉が数多く使用されているのは、蘇軾の詩文からの影響と考えられる。

前節で検討した「尽期」または「尽未来際」は、仏教の経典において頻繁に使用されている語であり、語感に堅苦しく、文章語に分類される傾向の言葉である。これに対し、「真箇」は口語ないし俗語に近い表現である。小歌が流行していた中世は僧侶たちが活躍した時代であるため、僧侶たちが愛用した「真箇」という漢語の口語的表現も日本語の各種表現に流入し、小歌の詞章の一部になったと考えられるのである。

一方、当時の日本事情を紹介した中国側の書物に侯継高著の『日本風土記』があり、これは明の李言恭、郝傑によって著された『日本考』と同一のものであることが知られている。同書には「しんこ」という語を「真箇」と解すべき記述がある。以下、関連する部分を引用する³⁸。

雑唱小曲

紫氣亘梭法乃尼乞打路外道理革乃付魯那來心可揺那

釋音 紫氣_月 亘梭_明 法乃_花 乞打路_米 道理_{好中} 革乃 付_風 魯_雨 那_{助語} 來_{正音} 心可
揺_{心誠} 那_{助語}

切意 月華花茂 趨好而來 沖風冒雨 心誠而來 曲意顛倒術述此意也

35 市川白弦他校注『中世禅家の思想（日本思想大系16）』岩波書店 一九七二年 三二五頁。同詩の頭注に「普州の人 盗人のこと。ここでは法ぬすびと。四川省の普州はむかし盗賊の集合する所という」とある。

36 禅文化研究所編『碧巖録索引：附種電鈔』禅文化研究所 一九九一年 二二三頁。「真箇在裏了也」「將謂真箇有恁麼事」「若真箇如此」など、「真箇」を含む項目が計9箇所がある。

37 漢詩「初入廬山三首」に「如今不是夢 真箇在廬山」（『四河入海』七ノ三 48ウ）、「道者院池上作」に「歸途更蕭瑟 真箇解催詩」とある（『四河入海』九ノ一 5オ）。

38 李言恭、郝傑著『日本考』（四庫全書存目叢書史部 第255冊）齊魯書社 一九九六年。

「雑唱小曲」と名付けられた歌であり、山歌³⁹の項に収載している。雑に唱する小曲というのは、正に当時の巷に流行していた小歌のことを指しているのではないかと推定される。この『日本風土記』は中国の書物であるため、日本の歌に音ごとにすべて日本語の発音に近い漢字を当てており、いわば万葉仮名のような表音的表記である。

同歌謡中の「紫氣」(月)、「付魯」(風雨)⁴⁰、「来」などの諸要素は、『宗安小歌集』三八番歌と符合し、何より歌の後半に出現している「心可揺那」も三八番の「しんこよの」と関連をうかがわせる⁴¹。以下、発音と意味の両面からその関連性を分析してみたい。

同書の日本側の写本は、国文学研究資料館所蔵の正徳写本があるが⁴²、当該の「心可揺那」の部分に関して読み仮名を付していない。これに対し、早稲田大学所蔵の二種の写本⁴³には、それぞれ「心可揺シニコヨノ心誠ノ那ノ助語ノ」「心可揺那」とカタカナで読み方を付している。これは江戸時代の人によって付けられた可能性が高く、必ずしも中世末期の発音と完全に一致するとは言えないが、参考になると思われる。『日本風土記』にある「心可揺那」は江戸時代の人が付した読み仮名で歌うならば、『宗安小歌集』三八番にある「しんこよの」と完全に一致しており、同じものと判断できる。この「しんこよの」は、中世末期から近世初期にかけて、歌を通じて広がった言葉と考えられる。

また、上述した発音の一致性だけではなく、「しんこ」の意味を判断できる手がかりも残されている。「切意」の部分では「心可揺」の意味を「心誠」と解説している。この「しんこ(よ)」の意味は、「まこと也」の意を持つ「真箇」という言葉と完全に符合している。但し、「揺(よ)」は、「那(の)」と同様、助詞として機能をしているが、独立して説明されず「心可(しんこ)」と一つの言葉にまとめられた可能性もありうる。この「心誠」という中国語の解釈から、「しんこ」=「真箇」と解釈できるのである。

京都大学国文学会が出版した『全浙兵制考日本風土記』⁴⁴の「国語索引」(一八、中段)の部分には、「心可」という語を「じんご(尽期)」として例示している。前節において「尽期」という言葉が「終わり、尽きる期」という意味しか持っていないことを確認した。従って、この

39 同歌を含めた山歌に関して、これまで多くの国語国文学の研究者に研究されてきた。

40 濱田敦氏は「付魯」に関して、「降る(フル)」と読むことを否定し、『宗安小歌集』三八番歌の「風雨」を例示し、「(風雨)フウウ」を主張している。同氏は『日本風土記山歌註解』では「あまり教養のなかつたと思われる倭寇に従つた荒くれの舟人達には、耳遠いものであつたらうから、これを音相及び意味の類似した「降る」とすりかえて歌つたとしても、決して不思議ではなかつたと云えよう。釋音は正に「付風魯雨」であり、その意味だけは、正しい解釋を施しているのである」(『京都大学文学部研究紀要』(1956)4、七八七～八一〇頁)と書かれている。筆者も濱田氏の指摘に賛同する。

41 従来より、「心」を「ココロ」として理解されることが多いが、濱田氏が指摘された通り(音仮名)、「正音」と表記される「来」のように、漢字本来の表意的用法であるならば、「心(ココロ)」も「正音」と註されるはずである。従って、「心」は表意的用法ではなく、表音的用法ではないかと著者は考えている。但し、濱田氏は「心可(しんこ)」に関して、「心誠」という解釈があるから、それは表意、表音兼用と主張しているほか、「心可」=「尽期」という結論を付けた(『日本風土記山歌註解』より参照)。

42 正徳三年(1713年)書写の『日本風土記』(【請求記号】96-878 国文学研究資料館所蔵)。本文の一部分に読み仮名が付けられている。

43 享和二年(1802年)書写(【請求記号】文庫08 D0263)と書写年不明(【請求記号】ル03 01055)の『日本風土記』(早稲田大学所蔵)。

44 京都大学文学部国語学国文学研究室編『全浙兵制考日本風土記』京都大学国文学会 一九六一年。同書の『日本風土記国語索引』の一八頁を参照。

「心誠」の意味を有する「しんこ（心可）」と対応できる日本語が「尽期」になる理由もなくなった。その代わりに「真箇」のほうこそ「しんこ（心可）」に相応しいと考えられるのである。さらに、『日本風土記』と宗安小歌集の三八番歌に関連性があることを考えると、『宗安小歌集』にある「しんこ」も「真箇」と解すべきではないだろうか。

三。「踏月」の雅と「風雨来」の誠

前節まで、三八番歌に現れた「しんこ」がどのような漢語に対応しているのかを検討し、「尽期」ではなく「真箇」が相応しいという解釈を提示した。この節では、更に同歌に使用されている「月をふんては」「風雨の来」の二つの表現を考察し、前節までに検討した「しんこ」を加えて小歌を再解釈する。

まず、「月をふんては」を検討する。前述したように、『日本風土記』には三八番歌と酷似する当時の日本の流行歌謡「雑唱小曲」が紹介されている。この歌謡の大意は、前節の「切意」の部分で解説した通り、「月華花茂 趨好而来 沖風冒雨 心誠而来」である。写本によって些細な異は生じるが⁴⁵、その大意は次のようである。「月の光が明るく、花が咲いている夜に来たる。これは天気の良い為である。風に沖び雨を冒しながら来た。これは心が誠実である為である。」類歌の関係にあるので、『宗安小歌集』三八番歌の意味も『日本風土記』の歌謡の意味に近いと推測できる。

とはいえ、三八番歌は月の輝きを直接的に描写するのではなく、「月をふんては」のように、「踏む」という人の行為を導入することで、晴れる夜という状況を表現している。管見の限り、「月を踏む」は和歌を代表とする日本の伝統的文学作品にはあまり見られない表現である⁴⁶。この表現は、むしろ漢語の「踏月（蹋月・蹈月）」⁴⁷に由来したと考えられる。例を挙げると、次のような漢詩句の用例がある（下線は筆者によるものである）。

照山奮火動 踏月俚歌喧

（劉禹錫「武陵書懷五十韻 并序」⁴⁸）

折花兼踏月 多唱柳郎詞

（温庭筠「秘書劉尚書挽歌詞二首」⁴⁹）

穿花踏月飲村酒 免使醉歸官長罵

45 特に二句目の「趨」に関して、国文学研究資料館所蔵の正徳写本は「趨」、早稲田大学所蔵の享和写本は「趣」と表記されている。渡邊三男著『新修訳註日本考』新典社 一九八五年 三一三～三一四頁。同書には「月は華き花は茂る 趨まさに好くこそ來れり 風を沖し雨を冒す 心誠なればこそ來れり」と訳しており、「まさに」と理解している。

46 『新編国歌大観 CD-ROM 版 Ver.2』の検索機能を利用し同表現の使用例は検索できなかった。

47 「蹋」「蹈」の意味は「踏」と同様。「ふむ」を指す。『字鏡集』（【請求記号】寄別13-55 国立国会図書館所蔵）には「蹋 フム 踏同」「蹈 フム」とある。

48 劉禹錫著『劉夢得文集附外集』（四部叢刊初編集部 156～157）上海商務印書館 一九三六年。

49 温庭筠著『温庭筠詩集附別集』（四部叢刊初編集部 166）上海商務印書館 一九三六年。

(蘇軾「次韻前篇」⁵⁰)

劉禹錫の詩句は、彼が朗州（現湖南省）に左遷された際に滞在地の民風や民俗を描いたものである。後半の「踏月俚歌喧」（月を踏んで俚歌喧し）は、月の夜に民謡の歌声が聞こえてくるという意味であり、地方の民衆が夜に歌を謡っている非常に賑やかな場面を描いている。温庭筠の「折花兼踏月」（折花に踏月を兼ねる）も『日本風土記』に現れた歌謡の解釈と同様、「月」と「花」を並列させ、月の下を歩みながら花の趣を楽しむという風流優雅な生活スタイルを描写している。蘇軾の「穿花踏月飲村酒」も同様の技法を用いており、同工異曲の妙となっている。『四河入海』では、同詩句を「脞云、此以下二句言安居之樂也」と解説している。「月を踏む」というのは、閑適または安逸なイメージが強く伝わる表現である。横川景三の漢詩「立春後一日。於松泉新居邂逅」には「新居招我對傳盃 踏月夜深扶醉回」⁵¹とあり、蘇軾の詩と同じく月の夜に酔酒の事情を書いており、一定の影響を受けていると言えるであろう。

晴れた月夜に歌を唄ったり、花見をしたり、酒を飲んだりするのは、如何にも優雅なことである。上述したことを『宗安小歌集』の三八番歌では明言されていないが、「月をふんては」（踏月）という表現の使用によって、裏に風雅なことが隠れているということが推察されるのである。

続いて「風雨の来」を検討する。風流雅趣の晴れる夜に対し、「風雨の来」というのは正反対の状況である。この「風雨の来」の「風雨」は、「ふうう」と読むのが一般的であり、「かぜあめ」という読み方は考えづらい。『日本風土記』にも「付魯（風雨）」と表記されていた。しかし、「来」という語に関しては議論の余地がある。前節において近代以降の国語辞書を調査し、そこから各種辞書には「くる」というルビを付けられていた時期があることが分かった。それは、『日本風土記』にある「来^{クル}正音」と関係があると考えられるが、「くる」ではなく「き」と読む説もある⁵²。

実は、漢詩句の中にも「風雨来」のような表現が多く存在する。例を挙げると、韋応物の漢詩「同徳寺雨後寄元侍御李博士」には「川上風雨来 須臾滿城闕」とある⁵³。黄庭堅の「題胡逸老致虚庵」にも「山隨宴坐畫圖出 水作夜窓風雨来」とある⁵⁴。従って、「風雨の来」という表現は、「ふううのらい」として漢詩風の読み方をする可能性が考えられる。但し、漢詩の場合、「来」の主語は風雨であるのに対し、三八番歌に使用される「来」という動詞は、掛け詞のように自然状況としての風雨が来ることと、風雨の夜に人間が訪れることの両方をかけていると考えられるのである。

次に「風雨」については漢詩の用例に照らして検討する必要がある。

『中華若木詩抄』には、「風雨」が使用されている次の二首がある。

50 『四河入海』（五之三、四二）。

51 「踏」、同「踏」。『翰林五風集』による。

52 「まず普通に訓讀して「き」とする以外にあり得ず（後略）」（『日本風土記山歌註解』を参照、前掲）。北川氏校注『宗安小歌集』（前掲）にも「風雨の来」とある。

53 韋応物著『韋江州集』（四部叢刊初編集部 147）上海商務印書館 一九三六年。

54 万里集九著『帳中香』（請求記号 WA16-88 国立国会図書館所蔵）を参照。

哭花 史景陽

曾愁香結破顔遲 今日妖紅委地時 若是有情争不哭 夜來風雨葬西施

… (中略) …

昨日マデ妖とト美ナル風情ヲ尽シタル花ガ、夜來ノ風ニ落^{おち}テ風雨ニ湿^ヌレテ地上ニ散乱シタハ、昔西施ト云^{いう}タ美人ヲ土^{はうふり}中ニ葬^{はうふり}タヤウナゾ。

(『中華若木詩抄』五七番⁵⁵)

落花 朱淑真

連理枝頭花正開 妬花風雨便相催 願教青帝長為生 莫遣紛と点蒼苔

一二ノ句、連理ノ枝ニ開ク花ヲ風雨ガ妬^サテ吹散サント相催也。

(『中華若木詩抄』二五七番⁵⁶)

二首の詩作は何れも「風雨」を悪役として描いている。西施のように美しく咲いている花が、夜に来る風雨のせいで地上に落ちてしまう。連理の枝に花が咲いていても、その綺麗に開く花を嫉妬するかのように風雨が激しく花を蹂躪する。漢詩の名作『春暁』の中にも「夜來風雨聲花落知多少」⁵⁷とあるように、風雨の来により花が散り落ちる。実は、風雨は一種の邪魔物としての象徴性を有する。

『日本風土記』にある「沖風冒雨 心誠而來」も次のように説明されている。風と雨は訪れる人の邪魔となっているが、訪れる人がそれを克服し、風雨があってもその困難を乗り越えてきた。これは誠な心を持っているからである。

また、「風雨」という語に関しては、風雨対牀という故事がある⁵⁸。これは詩人の韋応物が弟に贈った詩文の中に「寧知風雨夜 復此对牀眠」という名句があるのを蘇軾が深く感じ入り、自分の弟である子由に韋応物と同じ句を用いた詩を贈呈したという故事である。蘇軾は任官によって遠く離れた自分の弟のことを案じていた。風雨対牀という言葉は兄弟の会うこと、或いは親友の約束などを表現する言葉になっている。中世の僧侶の間では、この故事を活かしながら創作する詩文も数多く見られる⁵⁹。

さらに、『翰林五鳳集』には、英甫の漢詩「震旦扶桑天一涯 網維再見姪曇華 庭前幸有此枝在 春早桃花洞裡花」がある。この詩文を作った事由を説明した文章がある。

古澗悦可禪師者。予之益友。而同門生也。于寅于昏。雖風雨。不缺來往。先是。撥却仙萼苗根。游予之藩籬。見培栽悦可禪師之庭際。開其花則天々。而嫩華維那屋頭春色矣。今歲雞旦。微雪連天。寒威不減臘前。雖然。亭午靄然。而灑作細雨者。寔陽和之力也。予與悦

55 同31, 七一～七二頁。

56 同31, 二九三～二九四頁。

57 孟浩然著『孟浩然集』(四部叢刊初編集部 145) 上海商務印書館 一九三六年。

58 『大漢和辞典』(第十二卷, 三二五～三二六頁)の「風雨対牀」の項目を参照。

59 『翰林五鳳集』には「聽雨新亭踏雨過 主人延客合歡多 簷聲斷續泉聲答 若缺对床如夜何」(惟肖「賀聽雨新亭」), 「平原秋樹晚風吹 竝影鶴鴿終日隨 何異蘇家兄與弟 彭城夜雨對床時」(天隱「扇面鶴鴿」), 「絮飛花落盡成塵 只有君顏日々新 昨夜對床風雨過 綠陰四月又勝春 [四月初二]」(横川)などがある。

可禪師。以有風雨來過之約。即入其門。見庭際一株。則半雨半雪。如見碧桃和露受。維時
悅可禪師。自袖中。出賀元什。以見示予。予豈可默止。卒賦野偈。依其尊押云。

(『翰林五鳳集』卷第十二⁶⁰)

最初の部分の大意は次の通りである。悦可禪師は、我が良き友でありながら、同門の学生でもある。昼夜を問わず、風雨の日でも、往来と交流を欠かさない。これは風雨という困難を借りることによって、友情の深さを強調していると解釈できる。また、文中には「予與悦可禪師。以有風雨來過之約」とあり、我が悦可禪師との間に、風雨でも来るという約束があると説明している。このことから、この「風雨來過」の約束は真の友を象徴しているのである。

ここまで、漢詩文に現れた「踏月」と「風雨來」について検討してきたが、これに関連して、日本の伝統文学の中に現れる天候の要素にも触れておく。

『古今和歌集』⁶¹には、「月夜には来ぬ人待たるかき曇り雨も降らなむわびつつも寝む」(恋歌五・七七五・読人知らず)という歌がある。月が明るい晴天の夜に恋人の来訪を期待しているのに来てくれないので、かえって雨天になってほしいと諦めようとしている様子を歌ったものである。雨が降る悪天候は、当時の常識として恋人同士の逢瀬を害するものと認識されている。また、物語文学の中にも、雨を介して男女の愛情の深さを描写する場面も少なくない。『伊勢物語』⁶²の百七段には、雨の中に男が蓑と笠を用意し、びしょ濡れになって女に会いに行く記述がある。『落窪物語』⁶³の中にも、少将は豪雨を冒し姫君に会いに行く場面がある。そこで、姫君は「今宵は、身を知るならば、いとかばかりにこそ」と言い、大雨に負けずに会いに来ることは正に自分を深く愛する証だと少将の行為を賛美した。『枕草子』⁶⁴の二七四段にも「雨いみじう降るをりに来たる人なむ、あはれなる。日ごろおぼつかなく、つらき事もありとも、さて濡れて来たらむは、憂き事もみな忘れぬべし」とあり、女房たちの余談が記されている。雨の日に来てくれれば、不快なこともすっかり忘れてしまう。世間の人々はこのような行為を認め、雨夜の来訪者を賞賛する。雨夜の来訪は珍しいことであるが、女はそれを期待している。なぜなら、雨の夜に恋人が訪れてくることは、愛情の深さの象徴であり、その試金石ともなっているからである。

以上の各例から分かるように、平安時代以降の文学、和歌、和文の世界では、月または雨という天候や空の要素が重要な役割を担っており、日本の恋愛観の一要素として浸透していたように思われる⁶⁵。以上のような漢語からの影響及び日本の恋愛観を踏まえて、改めて『宗安小歌集』三八番歌を検討する。

60 同33, 二四七頁。

61 小沢正夫他校注『古今和歌集』(新編日本古典文学全集11)小学館 一九九四年 二九五頁。

62 片桐洋一他校注『竹取物語 伊勢物語 大和物語 平中物語』(新編日本古典文学全集12)小学館 一九九四年 二〇五～二〇六頁。

63 三谷栄一他校注『落窪物語 堤中納言物語』(新編日本古典文学全集17)小学館 二〇〇〇年 六一～六五頁。

64 松尾聡他校注『枕草子』(新編日本古典文学全集18)小学館 一九九七年 四二二～四二九頁。

65 既に諸先学たちの指摘があるが、『閑吟集』の一〇六番歌「雨にさへ訪はれし仲の 月にさへなう、月によなう」、隆達節小歌の「雨の夜にさへ訪はるるが、月に訪はぬは心変りかの君は」も「雨」と「月」の対照を利用している(同7, 六四頁を参考)。

同歌の歌い手は次のように思っていると考えられる。美しい月の夜に私を訪れる。これは世間においても一般的なことだ。風雨が来る夜にも、私のところまで訪れてくれる人がいれば、それこそ真に誠意をもつ人と言えよう。しかし、こういう人がいるのだろうか。いや、「世の常」に反して、こういう誠の人は少ないだろう。

この解釈では、歌い手が誠の相手を求める気持ちが感じられる。風雨の約は、従来より愛情に限定せず、人と人との信頼関係を象徴していると考えられる。韋応物や蘇軾のように、自分の弟と風雨の夜に会う約を結んだりする親族の情、或いは親しい友人が風雨を冒しても自分を尋ねて歓談に至る友情であり、このような時に訪れる側は誠な心の持ち主だという主旨が、三八番歌に表現されていると考えられるのである。但し、『宗安小歌集』は、古くから伝わってきた恋愛観を踏まえた上で、男女の間にある強い信頼関係を「風雨の来」という漢詩風の一表現に托している。

人が晴れた夜に逢うのは一般的である。しかし、天気が悪くなれば体が濡れたり暗くて道がはっきり見えなかったりする困難が伴う。風雨の日に私を訪れる人は、この困難を乗り越えて、きっと私のことを本当に愛してくれている人に違いない、誠意を持つ恋人だろうという意味として理解することができる。三八番歌は女の歌として捉えることも可能となり、本当に私を愛しているのなら雨の日にも来てほしいというように、当世の女性の気持ちをも伺うことができよう。

技法の面からいえば、三八番歌は対句の手法を意識していると思われる。これは単純に語彙間の対応ではなく、語句による意味上の呼応となっている。「月を踏む」と「風雨の来」は正反対の天候状況でありながら、「踏む」も「来る」も人の行為を表している。「晴天の夜に訪れる」と「雨天の夜に訪れる」が対になっている。一方、「世の常」と「真箇」も一つの対である。人間である以上そうするという「世の常」に対し、「真箇」は常識に反し、世に稀にしか見られないことである。困難から避けるという人間の本能と異なり、誠実に相手を愛しているからこそ「世の常」を越えるのである。

同時に、『宗安小歌集』七十一番の歌に使用された「しんこの君」という語も、「真箇の君」と解すべきと考えられる。誠意を持つ君は来なくても良い、人間は結局別れるものだから。これを男女関係を詠む歌を前提とするならば、別れる人に対する一種の諦めとして理解することもできるが、逆にわざと「来なくても良いよ」と言い、本当は相手に来てほしいという気持ちとなっている。なぜなら、相手が誠の心を持つ人であってほしいからである。また、二人が別れたとしても、あの人が誠意を持つ人ならばきっと私のことをずっと思ってくれているだろう、という裏に隠れた意味を読みとることもできるのである。いずれにせよ、三八番歌と同様、このような表現技法を用いることで相手の誠の気持ちを求める女性の姿を表現していると考えられる。

以上から、「しんこ」「しんこの君」が使用される三八番歌と七十一番歌は、これまで解釈されていたような「二世を契る」や「永遠の恋人」という「末永く」を強調するものではなく、「まこと」「真実」のような誠意を伝える歌だと考えられるのである。

おわりに

本稿は、『宗安小歌集』三八番歌を解釈するにあたって、「しんこ」という表現から始まり、「月をふんては」「風雨の来」という表現に着目して考察した。まず指摘したのは、これまで「しんこ」という表現が「尽期」と解釈されてきたのは、節用集に対する誤解から生じたものだったということである。「しんこ」は、「尽期」ではなく「真箇」として理解すべきだという結論に至った。この修正により、同小歌集七一番に使用されている「しんこの君」という表現も「真箇の君」と解釈できると考えられるのである。

次に、三八番歌の主旨は、愛情の深い来訪者を賞賛するという従来 of 訳と大きく変わらないが、「しんこ」の意味が従来「尽期」の同義語として解釈した「尽未来（際）」に由来する「永遠」「無限」という意味ではなく、「まこと」「誠実」の意味を有する「真箇」であることを明らかにした。その解釈には本質的な差異がある。

さらに、三八番のような漢語系表現が混ざっている小歌は、僧侶たちが吟詠する漢詩文と共通するところが多く、小歌と漢詩との間の親密な関連性を指摘した。平安時代以来の日本の恋愛観に基づき、単純に「月」や「雨」の要素を借りた小歌と比べていっそう強く誠の心を持つ男を待ち望む女性の心境を表現している。誠意を持つ男であれば、風雨の夜に訪れてくれという話題を歌に詠みながら、漢詩風表現の導入によって真心を持つ相手を待ち焦がれる女性の姿を表現しているのである。一首の歌は非常に短い、柔らかく純粹な和風表現と異なり、口語に近い「しんこ」という漢語を利用することで耳に響きやすく力が溢れるように創られている。個々の表現と表現に伴うリズムにより、明るく強気な女性の性格が表現されているだけでなく、伝統的な恋の題材に新味をも加えることに成功している。

漢詩に親しむ人が作り上げたあと、民間に流布して一時の人気を博したものと考えられる三八番のような小歌は、和漢折衷の意匠で「しんこよの」の一声を発出させて、女性の心境を一気に吐露する手法により、斬新なものとなったのである。

参考文献

- 吾郷寅之進著『中世歌謡の研究』風間書房 一九七一年
 浅野建二校註『室町時代小歌集』（新註國文學叢書）大日本雄辯會講談社 一九五一年
 浅野建二著『閑吟集研究大成』明治書院 一九六八年
 韋応物著『韋江州集』（四部叢刊初編集部 147）上海商務印書館 一九三六年
 市川白弦他校註『中世禪家の思想（日本思想大系16）』岩波書店 一九七二年
 植木朝子著『中世小歌 愛の諸相 『宗安小歌集』を読む』森話社 二〇〇四年
 大塚光信校註『中華若木詩抄 湯山聯句鈔』（新日本古典文学大系53）岩波書店 一九九五年
 岡見正雄他編『抄物資料集成 四河入海』清文堂 一九七一年
 小沢正夫他校註『古今和歌集』（新編日本古典文学全集11）小学館 一九九四年
 小野恭靖編『隆達節歌謡』全歌集 本文と総索引』（笠間索引叢刊115）笠間書院 一九九八年
 温庭筠著『温庭筠詩集附別集』（四部叢刊初編集部 166）上海商務印書館 一九三六年
 北川忠彦校註『閑吟集 宗安小歌集』（新潮日本古典集成 第53回）新潮社 一九八二年
 片桐洋一他校註『竹取物語 伊勢物語 大和物語 平中物語』（新編日本古典文学全集12）小

学館 一九九四年

- 京都大學文學部國語學國文學研究室編『全浙兵制考日本風土記』京都大學國文學會 一九六一年
 国文学研究資料館『歌謡：文学との交響』（古典講演シリーズ）臨川書店 二〇〇〇年
 笹野堅校註『近世歌謡集』（日本古典全書 第七十五回配本）朝日新聞社 一九五六年
 笹野堅著『室町時代小歌集』萬葉閣 一九三一年
 新編国歌大観編集委員会『新編国歌大観 CD-ROM 版 Ver.2』角川書店 二〇〇三年
 禅文化研究所編『碧巖録索引：附種電鈔』禅文化研究所 一九九一年
 高楠順次郎編『大正新修大蔵經 第三卷本縁部上』大正一切經刊行會 一九二四年
 高楠順次郎編『大正新修大蔵經 第十卷華嚴部下』大正一切經刊行會 一九二五年
 土井忠生他編訳『邦訳 日葡辞書』岩波書店 一九八〇年
 中田祝夫著『改訂新版 古本節用集六種研究並びに総合索引（影印篇）』勉誠社 一九七九年
 中田祝夫著『改訂新版 文明本節用集研究並びに索引（影印篇）』勉誠社 一九七九年
 中田祝夫他編『印度本節用集 和漢通用集他三種研究並びに総合索引（影印篇）』勉誠社
 一九八〇年
 中本環校註『狂雲集・狂雲詩集・自戒集（新撰日本古典文庫5）』現代思潮社 一九七六年
 濱田敦著「日本風土記山歌註解」『京都大学文学部研究紀要』一九五六年 第四卷 七八七～
 八一〇頁
 藤田徳太郎著『近代歌謡の研究』人文書院 一九三七年
 藤田徳太郎著『古代歌謡乃研究』有精堂出版 一九六九年
 佛書刊行会編纂『翰林五鳳集』（大日本佛教全書144～146）佛書刊行会 一九一四～一九一六年
 松尾聡他校註『枕草子』（新編日本古典文学全集18）小学館 一九九七年
 真鍋弘昌著『中世近世歌謡の研究』桜楓社 一九八二年
 三谷栄一他校註『落窪物語 堤中納言物語』（新編日本古典文学全集17）小学館 二〇〇〇年
 孟浩然著『孟浩然集』（四部叢刊初編集部 145）上海商務印書館 一九三六年
 李言恭・郝傑著『日本考』（四庫全書存目叢書史部 第255冊）齊魯書社 一九九六年
 劉禹錫著『劉夢得文集附外集』（四部叢刊初編集部 156～157）上海商務印書館 一九三六年
 渡邊三男著『新修訳註日本考』新典社 一九八五年

デジタル資料

- 国文学研究資料館 新日本古典籍総合データベース 『宗安小歌集』（【請求記号】99-84）
 国文学研究資料館 新日本古典籍総合データベース 『日本風土記』（【請求記号】96-878）
 国立国会図書館デジタルコレクション 『字鏡集』（【請求記号】寄別13-55）
 国立国会図書館デジタルコレクション 『帳中香 20巻 序 1巻』（【請求記号】WA16-88）
 国立国会図書館デジタルコレクション 『和英語林集成』（【請求記号】833-cH52w）
 早稲田大学 古典籍総合データベース 『日本風土記』（【請求記号】文庫08 D0263）
 早稲田大学 古典籍総合データベース 『日本風土記』（【請求記号】ル03 01055）

近代国語辞書類（編者略，五十音順）

- 『岩波国語辞典』岩波書店 一九六三年
『岩波国語辞典 第二版』岩波書店 一九七一年
『岩波国語辞典 第三版』岩波書店 一九七九年
『岩波国語辞典 第四版』岩波書店 一九八六年
『岩波国語辞典 第五版』岩波書店 一九九四年
『江戸時代語辞典』角川学芸出版 二〇〇八年
『旺文社古語辞典』旺文社 一九六〇年
『学研国語大辞典』学習研究社 一九七八年
『角川古語大辞典（第三卷）』角川書店 一九八七年
『言苑』博文館 一九三八年
『言海（第三冊自し至ち）』印刷局 一八九〇年
『広漢和辞典（中巻）』大修館書店 一九八二年
『広辞苑』岩波書店 一九五五年
『広辞苑 第二版』岩波書店 一九六九年
『広辞苑 第二版補訂版』岩波書店 一九七六年
『広辞苑 第三版』岩波書店 一九八三年
『広辞苑 第四版』岩波書店 一九九一年
『広辞苑 第五版』岩波書店 一九九八年
『広辞苑 第六版』岩波書店 二〇〇八年
『広辞苑 第七版』岩波書店 二〇一八年
『国語漢文ことばの林』立川文明堂 一九二二年
『古語大辞典』小学館 一九八三年
『時代別国語大辞典 室町時代編（第三巻）』三省堂 一九九四年
『小学館 日本国語大辞典（第十一巻）』小学館 一九七四年
『小学館 日本国語大辞典 第二版（第七巻）』小学館 二〇〇一年
『新言海』日本書院 一九五九年
『新訂大言海』富山房 一九五六年
『新明解国語辞典』三省堂 一九七二年
『新明解国語辞典 第二版』三省堂 一九七四年
『新明解国語辞典 第三版』三省堂 一九八一年
『新明解国語辞典 第四版』三省堂 一九八九年
『新明解国語辞典 第五版』三省堂 一九九七年
『新明解国語辞典 第六版』三省堂 二〇〇五年
『大漢和辞典』大修館書店 一九五八年
『大言海（第二巻）』富山房 一九三三年
『大辞典（第十四巻）』平凡社 一九三五年
『大辞林』三省堂 一九八八年

『大辞林 第二版』三省堂 一九九五年

『富山房国語辞典』富山房 一九七五年

『日本大辞書』日本大辞書発行所 一八九三年

『佛教語大辞典（上巻）』東京書籍株式会社 一九七五年

『明解国語辞典』三省堂 一九四三年